

あらた同窓會

平成28年 秋季号

平成28年11月23日発行

鹿児島大学農学部
あらた同窓会
学生会員向け会報

電話 099-285-8537



農場の夏を彩るヒマワリ





ブラジルの国花・イペの木（唐湊果樹園）



北辰蔵前のカンヒザクラ

目 次

大学院改組と農学部	岩井 久	2
「海外で経験し、学ぼう」－高等農林学校建学の精神から－		3

ビバ・キャンパスライフ

生物生産学科

作物生産学講座

「これから…」	作物研究室	学部4年	内門 滉喜	4
---------	-------	------	-------	---

園芸生産学講座

「大学生活を振り返って」	蔬菜園芸学研究室	学部4年	佐藤 辰哉	4
--------------	----------	------	-------	---

病虫害制御学講座

「大学旅行記」	害虫学研究室	学部4年	楠畑 勇祐	5
---------	--------	------	-------	---

家畜生産学講座

「国際交流を通して得たもの」	家畜管理学研究室	学部4年	吉村 農	5
----------------	----------	------	------	---

農業経営経済学講座

「鹿児島大学での4年間」	農業経済学研究室	学部4年	勘場 史也	6
--------------	----------	------	-------	---

生物資源化学科

生命機能化学講座

「おうび」	応用分子微生物学研究室	学部4年	山上 史熙	6
-------	-------------	------	-------	---

食品機能化学講座

「大学生活で得たこと」	食品化学研究室	学部4年	栗原 浩一	7
-------------	---------	------	-------	---

食糧生産化学講座

「農学部とわたし」	植物栄養・肥料学研究室	修士1年	福丸瑛里紗	7
-----------	-------------	------	-------	---

焼酎学講座

「大学生活を振り返って」	焼酎製造学研究室	学部4年	矢野 真也	8
--------------	----------	------	-------	---

生物環境学科

森林管理学講座

「大嫌いだったことが、一生ものになりました」	森林政策学研究室	修士2年	新井 愛那	8
------------------------	----------	------	-------	---

環境システム学講座

「大学生活を振り返って」	農業環境システム学研究室	学部4年	村上 優奈	9
--------------	--------------	------	-------	---

生産環境工学講座

「大学生活を振り返って」	利水工学研究室	学部4年	海田 悟史	9
--------------	---------	------	-------	---

獣医学科

基礎獣医学講座

「動物だらけのキャンパスライフ」	行動整理生態学分野	学部6年	大羽 真理	10
------------------	-----------	------	-------	----

病態予防獣医学講座

「6年を振り返って」	獣医公衆衛生学教室	学部6年	富野 由通	11
------------	-----------	------	-------	----

臨床獣医学講座

「大学生活を振り返って」	臨床病理学分野	学部6年	杉原 知佳	11
--------------	---------	------	-------	----

教育実習奮闘記	12
インターンシップ体験記	13
介護体験記	15
留学報告	16
編集後記	表紙裏



大学院改組と農学部

岩井 久（農学部長）

昨年この秋季号に寄稿した自分の文章を読み返して少しだけ戸惑いました。冒頭を「この2か月ほど桜島が静かです」で始めています。そして今年も同じ書き出しにせざるを得ません。というのは、桜島は本年も、8月下旬に爆発して以来、本日まで活動らしいものがありません。山体膨張を維持したまま静止しているようです。エネルギーの蓄積を考えると、単純に「降灰が無くて良い」とばかりは言っていられないようです。市の観光局に勤めている人の話では、桜島フェリーターミナルのインフォメーションセンターを訪れる外国人観光客が、パンフレットや掲示物を見て、「今日は何時ごろ爆発するのか？」と質問するので困っているそうです。

しかしながら、本年度の上半期は、日本全体が自然災害に見舞われる日々で、とりわけ九州は大変でした。4月14日以降に熊本県と大分県で相次いで発生した熊本地震、10月8日には阿蘇山が噴火、9月20日の台風16号の鹿児島県横断では地域の農林畜産業への被害が甚大で、農学部の指宿植物試験場や高隈演習林も多大な損害を被りました。特に演習林の被害は桜島の大大噴火時に匹敵するもので、関係教員と技術職員が国土交通省や林野庁などの助力を得ながら全貌を調査中ですが、復旧に要する経費・年限は見当がつきません。さらに、この原稿を入力し始めた昨日、今度は鳥取県で震度6弱の地震が発生しました。このように私達素人目から見ても、日本列島の地殻は有史以降〇〇回目かの新しい活動期に入ったようです。桜島は近いうちに目覚めるでしょうし、霧島や南西諸島の火山群にも目が離せません。また、地球規模での海水温上昇で、日本近海での台風発生も今後定常化するのではないのでしょうか？ これら一連の災害地域を俯瞰しますと、風光明媚な観光地が実は危険な地帯であることを認識できます。鹿児島県をはじめ南九州では、農林畜産業・防災・観光の三態を横断した研究や人材養成が必要です。

近年、鹿児島大学は、学長の指導の下に、南九州及び南西諸島域の活性化の中核的拠点をビジョンとし、ここ数年、地域防災センター、かごしまCOCセンター（センターオブコミュニティセンター）や産学官連携推進センターなど、鹿児島大学と地域社会の応用的な共同研究を支援する場が充実してきています。しかしマンパワーは十分とはいえません。全学的に更なる充実・涵養が求められる分野は前回寄稿で述べた「食の安全と利用加工」に加え、上述のような「環境保全や災害対策」に関わる研究と人材養成でしょう。

そのような中で試みが始まっているのが、全学的な修士課程の改組です。農学研究科は従来、基礎研究と応用研究の双方を推進していますが、これからは複数研究科を横断する枠組みが考えられます。例えば食品加工分野では水産学との共通領域が見出されるのではないかと、あるいは、どちらかといえば基礎に偏りがちだった理工学との間では、環境保全・災害予測などで方法論的な合体ができないか、また地域活性化においては、南九州の産業の大きな柱である観光の研究において、人文社会科学のある分野と融合した新領域が開拓できないかなど、柔軟な発想が求められています。

既に共通教育では、「大学と地域」のような地域志向科目を充実させ、一人でも多くの皆さんが、卒業・修了後に地元への興味を持って貢献して頂ける、動機づけになればと考えられています。しかしその一方で、前述の修士課程の改組では、あくまでも科学的な基礎知識をしっかりと持合わせた人材を前提として、地域ニーズを重視した学際的な応用研究を行う土壌を醸成しようとしています。よって、学部4年間での専門分野の基礎固めは、今まで以上に重要になってきます。あくまでもサイエンスに基いた地域貢献が重要だというわけです。

学生の皆さんも、これからの農学部・農学研究科の変化の有り様について引き続き注視していただき、在学中に留まらず卒業後も、忌憚のないご意見をいただければと思っております。

学生向け講演会（平成28年7月28日開催）

「海外で経験し、学ぼう」－高等農林学校建学の精神から－

農学部の前身の鹿児島高等農林学校の建学の精神の一つに‘海外雄飛’や‘海外で活躍できる人材の育成’があり、近年農学部生の海外留学や研修が盛んであることから、農学部や「学内幹事会」で相談して、今年度の農学部との共催の「学生向け講演会」は、「海外留学」をテーマにして行うことにした。学生の今後の留学や海外研修に資することができるように、「鹿児島大学生が活用できる海外留学・研修制度」と「学生による海外留学・海外研修体験」を話してもらうことにし、教職員・学生合計で約60名の参加者があった。以下は、講演会の概要です。

1. 畝田谷 桂子先生（グローバルセンター・学生海外派遣部門・部門長・教授/学長補佐）

鹿児島大学生が応募可能な留学制度、1) 協定校への派遣留学制度、2) トビタテ JAPAN 留学制度、3) 鹿児島県清華大学語学留学生制度、4) その他について、応募資格、応募期間、具体的な援助資金額などの紹介があった。特に、2014年スタートの官民協働海外留学支援制度「トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラム」では、1～4 期中に鹿児島大学から18名が合格し、そのうち半数近くが農学部生で、農学部学生の海外留学や海外研修への意欲が高いことが紹介され、今後も続いてくれるようにと期待が述べられた。



写真 畝田谷先生による留学・研修制度の紹介

2. 金本 由香さん（生物生産学科4年）：1999年からスタートした共通教育科目「国際協力農業体験講座（東南アジアファームステイ；渡航先はタイ、ベトナム、ミャンマー）」でタイに行った経験、タイでは、故谷口巳三郎氏（鹿児島農林専門学校昭和23年農学科卒業、2011年逝去）によって設立された「21世紀農場」、北部のロイヤルプロジェクトおよびメジョー大学における農業体験、現地住民などとの交流について報告があった。

3. 益満 みのりさん（生物生産学科4年）：鹿児島大学と大学間学術交流協定を結んでいるスペイン・バレンシア工芸大学に「トビタテ Japan」制度で約1年間留学し、スペインの文化・生活や学生生活などについて具体的に分かりやすい報告があった。



写真 学生による海外研修、海外留学報告
（左：金本さん、中：益満さん、右：梅木さん）

4. 梅木 由有さん（獣医学科6年）：「トビタテ Japan」制度で、オーストラリアクイーンズ大学イーランド大学獣医学部附属小動物病院、カランビン野生動物病院に留学し、野生動物関係の研究をしたこと、帰国後その経験を生かして、自費でバンバリー ドルフィンディスカバリーセンター、モンキーマイア ドルフィンリゾートでボランティア活動を行ったことなどについて報告があった。

（文責：農学部あらた同窓会 富永 茂人）

ビバ・キャンパスライフ

生物生産学科

作物生産学講座

「これから…」



作物学研究室
学部4年 内門 滉喜

私は、小学生のころから現在にいたるまで剣道を続けてきた。剣道とともに生きてきた。そんな剣道をはじめ、柔道や合気道など武道には道という漢字がつかわれている。これは、修練を重ねながら人間形成、つまり自己を形成していく道であるとされているからだ。私は、剣道だけではなく自分の人生も自己を形成していく道だとかんがえている。

大学に入る前に、学校の先生や両親など周囲から「大学は遊ぶところ」はたまた、「大学は遊びで行くんじゃない、勉強をしっかりとすることだ」、「大学で自分のやりたいことをみつければいい」など様々な意見をもらった。大学に関しては多くの人が多く経験から様々な意見が噴出して来る。はたして、大学の過ごし方としてどの考えが一番適切なのだろうか？ここで、自分の大学生活をふりかえってみる。私は大学四年間で多くの人に出会い、多くの知識に触れ、多くの経験も積むことが出来た。長期休暇のたびに、遊んだり、バイクで旅にでたりもした。部などに属さず、自分たちでチームをつくり剣道を続けた。バイトもたくさんしてきた。これらのなかで失敗や後悔、反省すべきことも多くある。私だけでなく大学生活を送ったひと、送っているひととも内容は違えどもかけがえのないそれぞれの経験、思い出としてあるだろう。

最初の方で述べたように、人生は道のようなものだと考えている。そうすると大学での経験は人生においてどちらに歩いていくか、また、その方向へと歩み出すための糧になっていくと思う。失敗や後悔ですら糧となるだろう。こう考えると大学の過ごし方に考えなどいらないのかもしれない。最後に、私はこれから自分の決めた方向に歩みだすのには十分な充実した大学

四年間だったと思う。その道がどんなものでも、回り道をすることになっても、歩みをとめることなくいきたい。

園芸生産学講座

「大学生活を振り返って」



蔬菜園芸学研究室
学部4年 佐藤 辰哉

大学生活も残り半年を切ってしまいました。よく使われるフレーズですが、本当に大学生活は長いようで短いです。私自身高校生の時に、早く大学生になりたい、4年間がすごく楽しみだなあと思っていたのがつい最近のことのようです。振り返ってみると、この4年間を通してずいぶん自分はたくさんのことを学ばせてもらったと思いました。

もともと、農業や農学に一切触れたことの無い人間でした。ですがその分、農学部で学んだことは全てが新鮮で、今まで知らなかった分野を1つ1つ吸収することはとても実のある経験となりました。農場実習やボランティアで実際に農業を体験してみると、この作物はこんな作り方でこんな姿をしていたのか、座学だけではわからない現場でのひと工夫など、日々発見することばかりでした。一方、農業の現実、大変さも身をもって体験できました。自主栽培では、虫に喰われ、病気に侵され、本の通りにやってもどこか違うように育ち、一筋縄ではいかない奥深さというものも初心者ながら感じました。それでも、スーパーに並んでいるものよりうまく育ったり、あんなに小さな種一粒からたくさん収穫できたりしたときは、とても嬉しかったし、育てている作物に対して益々愛着がわきました。

農業以外でも学んだことがあります。人間関係です。大学というところは色々な地方から人が集まってきます。私は福岡県で育ち、自分と似たような境遇の人たちと狭い世界で生きてきました。ですが、大学ではその視野が一気に広がりました。鹿児島にいるのに違う方言が聞こえてきたり、他学部の友達の話の聞いたり、就活やボランティア、アルバイト先で様々な世代の人と話をしたり、いかに自分の知らない世界があるかということが分かりました。社会人も目前ですが、自分

の視野を広げ、多くの人から知らないことを吸収し成長できる大人になりたいと思います。また、大学生活で得た人とのつながりをこれからも大事にしていきたいです。

病虫害制御学講座

「大学旅行記」



害虫学研究室
学部4年 楠畑 勇祐

私は、大学1年生から3年生の前期までサイクリング部に所属していました。そこで、サイクリング部を通して体験した旅の記録を書きたいと思う。

私が初めて旅に出たのは1年生の夏休みだ。この夏に、私は自転車で日本縦断を達成した。鹿児島島の佐多岬から北海道の宗谷岬まで、青函フェリーを除いてすべて自転車で走り道のりはとても長く、合計で37日間、3700キロだった。日本縦断を走るうえで様々な出来事があり、楽しいことよりもつらいことの方がはるかに上回ったが得られるものも大きく、日本縦断完走して良かったと断言できる。この時に強く感じたことがある。それは、資料を見たり様々な人から話を聞くよりも、実際に自分の足で自分の目で自分の体で感じるほうが何倍も記憶に残るとのことだ。資料で見たときは、その場所の香りや気温などは頭になく景色の事ばかり考えていた。しかし、実際に現地に行ってみるとその土地独自の香りがあり地元の人々がいて雰囲気も違うと感じた。つまり、嗅覚からの情報が入ってくるため記憶にも残りやすい。こいつは今更当たり前の事を言っているのだと思われる方もいらっしゃるかもしれないが、私はこの経験がなければ気づくのが遅れていたかもしれない。

サイクリング部に所属している間は日本縦断とは別に自転車で九州・四国一周、自転車と徒歩で富士山登山などいろいろな都道府県を合計で39都道府県周った。他にも国際協力体験講座でミャンマーに行ったりと大学生活を通じて様々なことにチャレンジしてきた。そこでも非日常的な体験を通して自分の考えの浅さや甘さなどを知ることができ、とても良い経験になった。また、旅を通じて様々な人、様々な考えに出会い広い

見解を持てるようになった。旅に出て本当に良かった。

家畜生産学講座

「国際交流を通して得たもの」



家畜管理学的研究室
学部4年 吉村 農

私は昨年の3月と9月の2回にわたり、共通教育でインドネシアに研修に行きました。この授業の目的は「持続可能な社会について考える」というものでした。もちろんその内容に興味は持っていましたが、自分の中ではまた違った目標も持っていました。

1回目。行く際は、まだ海外に行ったことがなく、単純に行ってみようということが目的でした。実際、ホームステイや学生さんの話を聞くなかで異文化交流はできましたし、こういう世界があるんだなという意味では勉強になりました。しかし、この時の私は基本的に受け身でした。もともと積極的な性格ではなかった上、インドネシア語はおろか英語も自信がなくてほとんど話せませんでした。帰国後、達成感と同時にこれではいけないなという思いが残りました。

2回目。ここでの自分の目標は「自分から情報を発信する」ことでした。幸いこの時のプログラムには、アジア太平洋国際学生会議という35か国200人程度の学生が参加するフォーラムに参加する機会があり、情報を発信するという意味では絶好の場でした。ただ気持ちだけで会話ができるほど甘くはありません。実は3月に帰国して9月までの間、1回目の研修で友達になった、インドネシアの日本語学校の生徒さんや大学生にSkypeでインドネシア語と英語で毎日のように授業をしてもらっていました。親日国だけに日本に興味がある人も多く、逆に日本語を教えるという形でした。

その甲斐あって、インドネシア語でも簡単な日常会話はできましたし、英語のプレゼンも無事に成功。英会話にも少し自信が持てるようになりました。会話の中でも自分から情報を発信することが幾度となくできました。この時私の授業に付き合ってくれた方々には本当に感謝していますし、今でも大切な友達です。この時思ったのは自分が研修を通して得た一番の財産はこの人達との繋がりだなということでした。これから

(6) あらた同窓会学生向け会報

も人との繋がりを大切に生きていきたいです。

農業経営経済学講座

「鹿児島大学での4年間」



農業経済学研究室
学部4年 勤場 史也

鹿児島大学での4年間は、想像以上に楽しく、そしてあっという間に過ぎてしまいました。

私は1年生のコース分けの時期に、現在の農業経営経済学講座（農経）を選んだわけですが、大学に入る前は、「農経だけはないな、植物だな」と思っていました。しかし、「農業経営学概論」の講義を受けて、農経にこうと決めたのです。その概論では、先輩たちが行った実習の内容がとても魅力的に紹介されていました。

2年生になって実際に農経にきてからは、始めはよそよそしい感じはあったものの、実習を重ねるごとに他のメンバーと仲良くなることができたと思います。卒論に取り組む時にはお互いのテーマについて意見を求め合えるほど信頼できました。

特に印象に残っている実習は、私が農経を選ぶきっかけにもなった農村調査実習です。実際に農家を訪れて話を聞かせてもらったり、スーパーの前でアンケートや試食テストをして市場調査を行ったりと、私にとって非常に貴重な経験になりました。

こういった実習を通して、私自身足りない、身に着けたいと思っていた積極性を身に着けることができたと思います。また、農経ではプレゼンを行う機会が数多くあり、人前で話すことは苦手でしたが少しは克服できました。積極性や人前で話すことは社会に出てから最低限求められることなので、農経を選んでよかったと思う一因でもあります。

私が農経の学生として過ごす中で得られたものは数え切れません。教授から学んだこと、先輩の背中を見て感じたこと、同級生と過ごして気づかされたこと、後輩に伝えることの難しさ、すべてが私を成長させ、これからも失わずにいようと思うものばかりです。多くの人に出会い、学び、支えられた4年間でした。

感謝の気持ちを忘れずに、出会えて良かったと相手

に思ってもらえる自分になれるよう努力していきたいと思っています。

生物資源化学科

生命機能化学講座

「おうび」



応用分子微生物学研究室
学部4年 山上 史熙

このタイトルを見て「おうび」とはなんだろうと思われた方も多いかも。 「おうび」とは私が所属する「応用分子微生物学研究室」の略称であり愛称だ。本文を書くにあたり、研究室配属で「おうび」を選択したことが間違っていなかったと改めて考えさせられた。6月に就職活動を終えたが、内定先の企業との最初の接点を作っていたのは当研究室の教授・石橋松二郎先生だ。就職活動を始めるとき、大いに相談に乗っていただき、その中で紹介していただいた先生の後輩の方との出会いに大きな感銘を受け、その企業に入りたいと思うようになり、その後の就職活動に励んだ。また、私の就職活動にも非常に理解を示してくださり、長期の研究の中断をはじめ、様々な場面で後押ししていただいた。心から感謝している。6月以降は休んでいた分以上に頑張ろうという気持ちで研究に取り組んでいる。

生命機能科学講座では3年次10月に研究室配属が行われるが、共に配属されたメンバーには非常に恵まれた。やる気に満ち溢れた個性豊かなメンバーとともに日々、実験を重ね、研究に励むことができる今の環境には本当に感謝している。また、「おうび」といえば飲み会だ、というくらい今年度は飲み会が多い。月に2回くらいのペースだが、夕方5時から夜中の2時、3時まで続くのだ。そこでは普段話す機会のない様々な話を聞くことができ、良い刺激を受けることが多い。「どこに行くかではない、何をするかだ」というのはアメフトと研究の両方に全力で取り組んでいる仲間の言葉で、非常に印象に残っている。飲み会を楽しみに毎日頑張っているといっても過言ではないかもしれない。4年間はあっという間で、気が付けばあとわずかか

だが、最後まで全力で楽しみながら、頑張っていきたい。

自分にとって最高の研究室選択ができたと思っている。改めて「おうび」に感謝したい。そして、卒業しても、いつかまた再開したいと思う。

食品機能化学講座

「大学生活で得たこと」



食品化学研究室
学部4年 栗原 浩一

鹿児島大学に入学してから、本当にあっという間でした。大学生活でたくさんの経験をし、人間的に大きく成長できたと思っています。

大学入学当初は、地元の山口県から鹿児島県に来たため、全く知り合いもおらず、正直不安でした。今となっては、たくさんの出会いに恵まれ、多くの友達と充実した学生生活を送ることができています。

少しずつ大学に慣れ始めてきた1年生の後期からは、人生初めてのアルバイトも始めました。私は飲食店でアルバイトをすることになり、自分のことのみを考えるのではなく、一緒に働いている人にも気を配ることの大切さを実感し、協力して働くということがどういうことなのか学びました。

大学2年生になると、小さい頃から続けていた野球を社会人の方々と一緒に始めました。そのチームに入ったことにより、コミュニケーション能力が身に付き、社会人の方々ができるような職に就き、そのきっかけなども聞くことができ、とても勉強になりました。また、大学3年生になるとチームの主将となり、先輩方を引っ張っていく難しさ、そして責任感を持つことの大切さを学ぶことができました。

大学3年生になると、将来したいことを、さらに真剣に考えはじめ、私は食品化学研究室に行くことを決めました。研究室生活が始まり1番最初に思ったことは、先輩方の偉大さです。淡々と自分の研究を進め、そして実験の結果から「どうしてこうなったのか？」などを考えている姿を目の前で見えてきて、自分ができるのか不安にも思いました。しかし、今では研究室に後輩が来るようになり、私が目標にしてきた先輩方の

ようになりたいと思っています。

残りの大学生活では、日頃からお世話になっている研究室の先生方と実験を進めていき、何らかの成果をあげたいと思っています。また、大学に進学させてくれた両親にも感謝し、最後まで充実した大学生活にしていきたいと思っています。

食糧生産化学講座

「農学部とわたし」



植物栄養・肥料学研究室
修士1年 福丸 瑛里紗

将来は農業に携わる仕事に就きたい。そうだ、農学部へ進もう。このように考えて農学部へ進学した学生さんは多いと思います。私自身もその一人です。しかし、私の場合、他の学生さんとは少し異なり、大学4年間で教育学部で過ごし、大学院から農学部へ進学してきました。そこで今回、この記事を通して、私が農学部への進学を決意したきっかけと他学部からみた農学部の魅力についてお伝えしたいと思います。

私が農業に興味を持ち始めたのは、大学3年の時でした。私が所属していた学科は、教育学部にもかかわらず、栽培学や栽培実習の講義がありました。それまで作物を育てる機会がなかった私は、この講義を通して、農業の楽しさや大変さ、やりがいを実感することができました。そこで、卒業研究も、教育と農業を組み合わせたテーマを考え、給食残飯から作った有機質肥料の肥料効果について研究しました。大学4年の時は、研究でほぼ毎日学校に通い、大変でしたがその中には楽しさもありました。しかし研究を進める中で、肥料成分を分析したいと思ったとき、学校教員養成を目的とした教育学部の講義内容や技術では学べないこともあると実感しました。また同時に、専門的知識を習得したい、スキルアップしてから社会に出たいと強く思うようになり、農学部への進学を決めました。

農学部に進学してはや半年、これまでの農学部の魅力について変化がありました。これまで専門性の高い農学に関する知識を習得できることが農学部の魅力だと思っていた私ですが、学部時代の友人に「農学部って学んだことがすぐ生活に活かせるからいいね」と言

(8) あらた同窓会学生向け会報

われ、専門職に就かなくても学んだことが生活する中で何かしら活かせることは素晴らしいことであり、他学部にはない魅力ではないかと考えるようになりました。このことから、農学部で学ぶこと全てが今後の生活に活かすことができると思うので、できるだけ多くのことを習得し、有意義なものにしたいと思います。

焼 酎 学 講 座

「大学生活を振り返って」



焼酎製造学研究室
学部4年 矢野 真也

大学生活を振り返ると高校以前の生活に比べ、本当に充実した三年半だったと思う。その様な大学生活の中で、私はあることを意識するようになった。それはひとつひとつの動作にどのような意味があるのかを考察することである。

きっかけはいたって単純であった。一年生の夏休みから居酒屋でアルバイトを始めた。女将さんから仕事の内容を教わる時、細かなことにもお客様を思いやる意味が込められていることを学んだ。仕事場で行う行動には、いずれも納得のいく理由があることを学び、とても感銘を受けた。仕事は、細かな作業が多く、覚えることは大変であったが、その作業を行う理由を知ることによって、幾分仕事を覚えやすくなった。それをきっかけに、様々な行動にどのような意味があるのかを自然と考えるようになった。そのアルバイトは半年ほどやめてしまったが、言われたことをただ淡々と行ってきた自分にとっては、考え方を見直すよいきっかけとなり、大きな成長の糧となった。

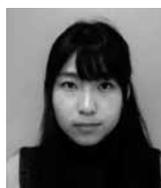
アルバイト先で学んだ考え方は研究室においても非常に役立っている。今年の春から卒業論文を作成するための実験テーマを決め、実験を開始した。大学三年間で学んできたことから、ひとつひとつの実験手順にどのような意味があるのかを考え、分からない時には先生や先輩方に聞くことで理解している。これを習慣化させることにより、研究者にとって必須である考察力を培うことができ、更に、どのような作業を行えば目的となる結果が得られるかといった、自分自身に対するコンサルティング能力を高めている。

他にも様々な経験をしてきたが、その都度、他者の助力のおかげで、自身を成長させることができた。多くの人に対して、本当に感謝しなくてはならない。この感謝を形とするべく、残りの大学、大学院生活も有意義なものとし、社会に大きく貢献できるように尽力したい。

生物環境学科

森 林 科 学 講 座

「大嫌いだったことが、一生ものになりました」



森林政策学研究室
修士2年 新井 愛那

私は高校3年生まで大阪で育ち、毎日御堂筋線で高校へ通い、放課後や休みの日には友達と難波や梅田へ出かけるなど、山や海、自然とは全く無関係の生活を送っていました。

「暖かそうだし、受かりそうだから」というふざけた理由で、何も考えずに鹿大に来たため、火山灰や方言、お店がないこと、時給が低いことに耐えられず、月に何度も帰省し、さらに自分の進むコースが大嫌いな森林(山)になった際には大学を辞めることも本気で考えました。そんな私に「絶対に後悔はさせない」と言って下さった先生を信じて、最初のオリエンテーションに参加すると、山は想像とは全然違って、空気や緑がキレイで、お弁当は美味しいし、なんなら山用品はカワイイし、ちょっと好きかも…?と思い、そこからはどんどん山にはまっていきました。大学2年生のときに参加した海外研修で、バンフ国立公園を訪れ、国立公園に魅了されたことがきっかけで、3年生の研究室配属では森林政策学研究室を選びました。

研究室では、前代未聞の生意気さを持つ私を先生方や先輩、後輩が受け入れて(?)くださり、おかげさまで居心地は良く、「この研究室いややわ」などと思ったことはありませんでした。卒論と修論では、希望通り国立公園に関わる研究ができ、毎月のように屋久島国立公園へ行っては山へ登っていました。研究を通して、もっと山や自然が好きになり、就職先は山奥や離島などの僻地勤務の多い環境省を選びました。

この6年間で、大嫌いだと思っていたことが大好きになり、来年からは仕事として一生ものになります。来年からは嫌だ嫌だと喚いても、助けてくれる先生はいませんが、何事も頑張っていきたいと思います。学生のうちは先生が助けてくれたりと、案外何とかできるので、後輩にはもっと意欲的に色んなことに挑戦して欲しいし、誰に反対されようが自分の「好き」を大切にしたいと思います。



環境システム学講座

「大学生活を振り返って」



農業環境システム学研究室
学部4年 村上 優奈

この文章を書くにあたって、大学生活を振り返ってみると本当に早かったなと改めて感じます。入学当初は慣れないことも多くありましたが、今では鹿児島での大学生活を楽しむことができています。

私は園芸研究会というサークルに所属し、主に花や野菜の栽培をメインに活動しました。農場実習のような農学部らしい(?)作業が楽しく、また周りの人々にも恵まれとても充実した活動だったと思っています。特に同級生の友人達とはサークル活動以外の時間も共にし、楽しい思い出が沢山できました。この繋がりに感謝し、卒業後も大切にしていきたいです。

そして、大学2年から3年にかけて初めてのアルバイトを経験し、社会で働くことの大変さを痛感しました。しかしアルバイトを通じて、状況を把握し自分にできることを見つける臨機応変さ・仕事に対する責任感などを学ぶことが出来ました。

3年の夏になり研究室に配属されると、就活や卒業論文という自分にとっての「乗り越えなければならない壁」がより大きく感じられるようになりました。特に就活は、私たちの学年から選考開始が前倒しされたことで、焦りが常にありました。ボランティアや海外研修、インターンシップといった経験を積んできた他の就活生と自分を比較し、落ち込んだこともありましたが無事内定をいただき、今はほっとしています。これからは卒業論文に力を入れつつ、学生最後の自由な時間を満喫したいと思います。

この3年半、充実した大学生活を送ることが出来たのは私に関わってくれたさまざまな人、そしてなにより家族の支えのお陰です。4月からは鹿児島を離れ、新しい場所で社会人として働いていきますが、大学生活で学んだことを忘れず何事にも一生懸命取り組んでいこうと思います。

生産環境工学講座

「大学生活を振り返って」



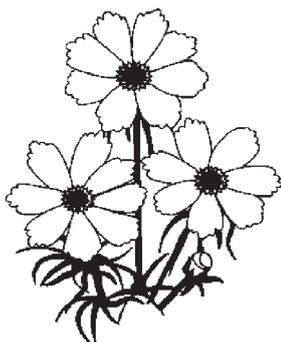
利水工学研究室
学部4年 海田 悟史

私は、大学生活を振り返って、多くの素晴らしい御縁に恵まれた4年間であったと思います。大学に入学した当初、「何がしたい」とか、「何をを目指したい」といったことは殆ど考えていませんでした。しかし、私は入学してすぐに困難な課題でも挑戦するという「進取の精神」という言葉を知り、目の前のことに何でも取り組もうと決めました。これまでの出会いの中で、挑戦し続けたことで、多くのことを学ぶことができたと思います。入学当初、生協のSEQ(コミュニケーション)講座に参加し、まず行動してみることの大切さを知りました。その頃、たまたま実験で同じ班だった先輩の勧めで、生協のCLA(新生活用品の販売)のアルバイトで2年までしました。先輩たちに指導を受けな

がら、販売を通してコミュニケーションスキルを磨くことができました。それがひと段落すると、SEQ 講座でお世話になった生協の方にパソコン講座の TA に誘われました。最初は苦労しましたが、工夫していく中でどう分かりやすく教えたらいのかを学びました。3年になって運営にも関わり、受講率の向上を追求する中で、楽しんで受講してもらえらるることの大切さを学びました。

私自身で何か自発的にできないだろうかと考え始めていた時に、先輩から「内之尾棚田を守り隊」(農作業手伝いのボランティア)のリーダーにならないかと言われ、引き受けました。農作業だけでなく、より農家のためになるような活動はできないかと考え、水田生態系の調査も行いました。最終的に、自分たちの学んだことを踏まえた考察と提案を発表し、営農環境の保護につながりました。これらの経験から、私は大きく成長することができました。

そして進路を決める時、これまでの出会いや学んだことを社会で生かしたいと考えました。というのも、農林水産省のインターンシップや農村でのボランティア活動などを通して、自治体職員の方々の地域の問題への対応、過疎地域の方々がむらおこしの取り組みを行っている現実を目の当たりにしたためです。自らを生かす仕事をしたいと考えて公務員試験を受験し、縁あって鹿児島県庁の農業土木職に合格することができました。就職試験を振り返ってみると、これまでの様々な出会いから学んだことに助けられた部分も多く、また全力で取り組む中で自ら工夫したことが生かされたから最終合格できたのではないかと思います。インターンシップ先で「物事は、すべてどこかで繋がっている。だから、何事にも真剣に全力で取り組みなさい。」と言われた言葉が、まさにそうだと感じます。これからも御縁を大事にして、「進取の精神」で取り組み続けていきたいです。



獣医学科

基礎獣医学講座

「動物だらけのキャンパスライフ」



行動生理生態学分野
学部6年 大羽 真理

私は実家が田舎であったためか、小さな頃から動物が大好きでした。そして、もっと動物のことを知りたいと思い、鹿児島大学農学部獣医学科に入りました。獣医と聞くと、どんな種類の動物のことでも勉強すると思いがちですが(私も中学校まではそう思っていました)、主に学ぶのは犬猫などの伴侶動物や牛豚などの産業動物についてです。一般的な動物好きの人からしてみれば十分な種類かもしれませんが、私はもっと色々な動物のこと、特に野生動物のことについて知りたいという気持ちがありました。そこで、サークルも野鳥研究会、ウミガメ研究会、それに野生道と動物関係のものばかり入ることにしました。ちなみに、鹿児島大学を選んだ理由の1つはウミガメ研究会に入らなかったからです。獣医学科に入学し、サークルも動物関係ばかり…夢にまで見た動物だらけの大学生活がこうして始まりました。平日の昼間は、授業で動物の体の仕組みや病気について勉強し、夜になったら砂浜にウミガメを見に行く。土日は土日で、山や海に野鳥を見に行ったり、動物園や水族館のバックヤードを見学しに行ったり、動物のぬいぐるみを買ったりと、寝ても覚めても動物のことしか考えていない生活でした。とても充実した大学生活でしたが、今振り返ってみると、動物関係以外のことにももっと関心を持って、色々やってみたかったという気持ちも少なからずあります。ですが、自分が好きなものに好きなだけ向き合えたこの6年間に後悔はありません。恐らくこれからの人生も動物とは切っても切れない生活を送ることになると思いますし、死ぬまで動物好きのままではいるとは思いますが、この大学生活以上に動物たちと深く関わる時間は持てないと思います。本当に楽しい動物だらけのキャンパスライフでした。

病態予防獣医学講座

「6年を振り返って」



獣医公衆衛生学教室
学部6年 富野 由通

卒業まであと5ヶ月あまりですが、6年間の学生生活を振り返ってみたいと思います。

長い浪人生活を終えた私は、入学当初、初めての一人暮らしでワクワクしていました。小学生から高校までずっとバスケットボール部に所属していたので、大学でも続けたいと思っていたところ、獣医学科のバスケットボールサークルがあるということで入部しました。1年生から6年生まで多くの先輩方がいらっしや、先輩方に練習後にご飯に連れて行っていただいたり、学生生活のアドバイスをいただいたことは今でもいい思い出となっています。

学年が上がるにつれて、勉強が忙しくなりました。特に、2年生の頃はとても苦勞しましたが、友達に分からないところを教えてもらったりしながら、必死になって単位を取得したことを覚えています。

4年生から獣医公衆衛生学研究室に所属しました。入った当初は、先生方や先輩方から実験の手技やプレゼンのスライドの作り方などをたくさん教わり、細かいところまで指摘してくださいました。この1年間は私にとって大きく成長できた年で5、6年生でどういったことをやっていけばいいのかという筋道がみえてきたような気がしました。また、獣医学をもっと学ばなければ、という思いは人一倍強くなった気がしました。

5年生から卒論のテーマも決まり、地道に実験を繰り返しました。うまくいかないときもあり、凹んだりしたときもありましたが、先生方や先輩方が温かく見守って下さったおかげで乗り越えることができました。また、学会発表の機会を4回もいただき、人に分かりやすく説明できるようになるための訓練を積むことができ、とてもいい経験になりました。

今、6年の10月で卒論に取り組む毎日です。これまでに学んできたこと全てが役に立っていると強く実感しています。少しでもよいものになるように努力していきます。そして、国家試験も無事合格出来るよう、全力で取り組んでいきます。

臨床獣医学講座

「大学生生活を振り返って」



臨床病理学分野
学部6年 杉原 知佳

早いもので鹿児島に来て6年が経ちました。晴れて鹿児島大学のキャンパスに足を踏み入れた春、縁もゆかりもない土地で始める大学生生活に不安はあったものの、憧れていた獣医師への道を一步ずつ歩き出しているという実感に胸が高鳴ったことを覚えています。

6年間の大学生生活を思い返すと、本当に様々なことを経験することができました。自由な時間を活用し、サークル活動に参加したり、海外旅行やキャンプに行ったり、アルバイトも6種類ほど経験しました。新しいことに挑戦するたびに新しい交流が増え、そこで出会った、志が高く、様々な価値観を持った仲間達の存在は、いつも私を奮い立たせてくれました。学科の同期と大学祭やグループ研究を協力して行い、時には衝突したことも、今となっては微笑ましい思い出です。研究室に所属してからは、附属動物病院での実習や卒業研究など、獣医学生らしい忙しい日々を送りました。特に卒業研究では、地道に実験を続けても思うような結果が出ず、頭を抱えることもありましたが、しかし今振り返ると、自分の考えていたストーリーが実証されることがなくても、正しい方向を向いて努力を惜しまなければ、何らかの成果を手に入れることができ、得られた結果から考察することで前に進むことができる、ということをもっと学んだ貴重な体験でした。この経験がきっと私の糧となり、これから先、困難に立ち向かう際の武器となってくれるでしょう。

無事に国試に合格することができれば、春からは地元広島で社会人一年生として新しいスタートを切ります。鹿児島で出会った仲間達と離れることに今から寂しさが募りますが、一回り成長した姿で再会できることを目標に、精一杯頑張っていきたいです。

メモリー

～進路・就職に役立つ先輩の経験・体験談～

教育実習奮闘記



「押し付けない授業」

農学部生物生産学科 作物生産学講座
熱帯作物学研究室 4年 亀澤 圭

6/2～6/15の2週間、私は母校である宮崎農業高校に教育実習生として行きました。宮崎市内の喧騒の中にありながらも、果樹園から鳥のさえずりや畑から虫の声が聞こえてきます。高校生の頃この環境で学ぶことができ本当に幸せだったと、当時の思い出を振り返りながら実習に挑みました。約2週間、様々な事に失敗し、悩まされました。その中でも「授業の進め方」について話します。

人の前に立って話すことが苦手な私は、その苦手意識の殻を破ることから始めなければなりません。最初の授業は自分に余裕と自信が持てないという要因から、ただひたすらに板書や教科書に気を配り、時間ばかりを気にしていました。この時、自分のことしか考えておらず生徒のことは考えていませんでした。

授業後、生徒のようやく終わったというために、自分が情けなくなりました。それと同時に、楽しいと思える授業とは何なのか考えました。私が見つけた答えは「なぜ？」を問うことでした。「なぜ？」を真剣に考えた先には発見や驚き、無知への恥ずかしさ、感動など様々な感情が湧いてきます。どの感情も記憶に残りやすい上、自分の頭の中を整理するいい機会にもなると思いました。いろんな面で「なぜ？」を問うことで、知識の幅が広がると感じたのです。

しかし実践したものの、なかなかうまくいかないのが現場でした。考えがまとまらない生徒への対応や予測しなかった返答への対処、脱線した時の戻し方などさらなる課題が次々と出てきました。ただその内、生徒と議論していることに楽しさを感じるようになりました。身を乗り出して自分の意見を言う生徒やジェスチャーや絵で表現する生徒、その場でなくても後で意見を伝えに来る生徒など、考えることに楽しさを見出している生徒の変化にやりがいを感じました。

こうやって、生徒も教師も共に日々成長するのだと身を持って経験することができました。



「教育実習を通して」

生物資源化学科
生命機能化学コース生分子機能学研究室
4年 若松 美里

大学4年5月母校にて2週間教育実習を行いました。実習前、授業経験のない私が「教師」になることができるのかと不安でいっぱいでした。しかし、長いと思っていた2週間は充実した毎日であつという間に過ぎていき、まだがんばりたいという所で最終日を迎えてしまいました。

担当クラスは3年生、授業は2年生を対象に行いました。

実習を通して教師は「授業をする」「担当教科を教える」だけが仕事ではないと強く実感しました。授業をすることに精一杯で生徒との信頼関係を築き上げることの大切さを見失っていた私は授業を行わなかった担当クラスの生徒たちに対し信頼関係を築けるよう行動に移せませんでした。このことがこの2週間での一番の反省点です。これは「教師としての自覚」不足が原因だと思います。

授業はいかに分かりやすく覚えるよう印象付けるかを意識しました。内容をしっかり理解した上で用語を覚えたほうが記憶として残りやすいと思ったからです。人生初めての授業は緊張と大きな不安で心が押しつぶされそうでした。担当先生から「なぜこの分野を学習するのかを生徒に伝えること」「具体例をうまく利用すること」を指摘され、「声の大きさ」と「字の丁寧さ」は私の強みであると言ってくださいました。「分

かりやすかった」という生徒からの言葉は私の励みになりました。

2週間という短い期間でしたが多くのことを学び、充実した日々でした。私が農学部に興味をもったきっかけは高校時代に出会った教育実習生です。当時の私のように少しでも私が生徒により影響を与えられていたら幸いです。2週間楽しいことばかりでなく大変なこともありました。そんな2週間を乗り越え、充実したものにできたのは先生方や他の教育実習生たち、両親の支え、そして生徒たちの励みがあったからだと思います。教育実習を通して得たこの貴重な経験は自己成長につなげ、活かしていくべきだと考えます。



「教育実習を通して」

生産環境工学コース

農地工学研究室 4年 村富 成人

私は今年の6月に高校農業免許を取得するため、母校で農業土木の教育実習を行いました。高校卒業後も何度か訪ねていましたが、今回は実習生としての訪問でしたので、少し複雑でした。高校生活を送った見慣れた校舎でも、先生という立場では、学生の時とは違ったものを感じました。教わるだけでなく教える立場。生徒がより良く学生生活を送れるよう日々の業務を行っている先生方の姿を見て、何か一つでも吸収しようと実習に取り組みました。

実習期間中はどのように生徒たちと関わるか、どうしたらもっと分りやすく授業行えるかを考えていました。授業が終わるたびに、指導教員と今の授業のどこが悪いのか、何か感じたことはないか、生徒たちの反応はどうだったかなどを話し合いました。

初めて教壇に立った時の緊張感はとても強烈で、今でも覚えています。しかし、その緊張も場数を踏むに連れて和らいでいきました。また、日が経つと休み時間や放課後には生徒たちが質問をしてくれるようになりました。解説をしていると、担当の先生から「実習生に質問を聞きに来るのは珍しい」と言われ、生徒から頼りにされているのを実感しました。そうしているうちに研究授業の日が来ました。研究授業は全く思うようにいかず、関係者が集まった合評会では悔しい思いをしました。

実習の中で、いろいろなことを学び、体験し、反省しました。その上で自分がまだまだ教員として未熟であることも痛感しました。しかし、何より一番印象に

残ったことは生徒たちが楽しそうに授業を受けてくれたことです。私もこの実習で先生の醍醐味を知り、教職員に大きな魅力を感じました。大学生活の中でも、この教育実習は私にとって心に残るかけがえのない体験になりました。

インターンシップ



「インターンシップを終えて」

生物環境学科 森林科学コース

木質資源利用学研究室

学部3年 森脇 里奈

私は夏季休暇中に、長崎県島原復興局保健部にて三日間のインターンシップに参加しました。インターンシップを知ったきっかけは、私と同じ長崎出身の友人に誘われたことでした。長崎で就職したいと考えていたため、地元で行われている業務ややりがいを知りたいと思い、参加を決めました。

保健所は一般衛生行政に属する機関であり、生活衛生や食品衛生、環境保全に関することなど幅広い業務が行われています。その中で給食施設や廃棄物処理施設の指導・監視同行や検査の補助等を体験させていただきました。特に印象に残っているものが給食施設の巡回指導と食品検査です。これらは摂食者の健康を守ることを目的としており、私が通っていた幼稚園や小中学校の給食施設でも行われていたことを知りました。自分の経験と結びつけることで、人々の健康を守り、安心した暮らしに役立っているのだと理解しやすく、この仕事に対してやりがいを感じました。

また、私が大学で学んでいる分野に合わせて研修内容を考えてくださり、最終日には、資源の循環型利用に取り組む、木質バイオマス発電所などの施設へ同行させていただきました。専門の知識を深める貴重な機会まで与えてくださった、職員の方々の人柄の良さを感じました。

仕事を通じて、公務員という立場から人々の生活を支えている職員方の姿を見たことで自分の仕事に対する中心軸を定めることできたと思います。インターンシップを終えて、「地域に貢献したい」「多くの人を支える仕事がしたい」と思うようになりました。三日間で学んだ経験を活かし、これから就活に向けて様々な

ことに挑戦をしていこうと思います。インターンシップへの参加を考えている人に、現場を経験することの楽しさと自分を成長させるチャンスが多くあることを伝えたいです。



「インターンシップを通して」

生物資源化学科 食品機能化学講座
栄養生化学・飼料化学研究室

学部3年 西木場菜央

今年の夏休みの8月19日から5日間、私は奄美大島開運酒造でインターンシップをさせていただきました。私は、焼酎学講座に所属している訳ではないのですが、講義で焼酎の製造について学ぶ機会がこれまで何度かありました。その時に、焼酎の製造についてとても興味を持ち、実際に見て体験してみたいと思ったので、このインターンシップに参加しました。

インターンシップでは、黒糖の溶解や米の蒸し作業、もろみの攪拌などを行いました。特に、印象に残っているのは、黒糖焼酎の好きな方に集まってお話し、飲み比べをしてもらって意見を求める会に参加したことです。この会では、黒糖焼酎の温度を変えて飲んだ時に風味はどのように感じるか、また、刺身や揚げ物などの様々な料理に対してそれぞれに合う黒糖焼酎の飲み方にはどれがよいか、さらには、改善点についても意見をいただきました。このような会に参加するのは初めてだったので、とても新鮮に感じました。また、消費者と近い距離で生の声を聞くのは心に深く響き、その重要さも身に染みて感じることができました。こんなにも消費者との距離を近づけてお話しできるのは、この地域ならではの、人のつながりを大切にする姿が印象的でした。

インターンシップの期間中、自分の勉強不足により、悔しく感じる部分が多くありました。焼酎の製造について講義で学んではいたのですが、黒糖焼酎の製造については知らないことばかりで、最初は質問をすることもできませんでした。勉強していたつもりでも深い理解をしていなかったと痛感し、講義の受け方を見直していきたいと思いました。

このインターンシップに行かなければ気付かなかったことや経験できなかったことがたくさんありました。ここで学んだことをこれからの大学生活の中でも活かしていきたいと思います。最後に、お忙しい中、受け入れてくださり、ご指導してくださった奄美大島開運

酒造の皆様、本当にありがとうございました。



「平川動物公園でのインターンシップ」

家畜生産学講座
家畜管理学研究室

学部3年 引地 千晶

今回アグリビジネス研修を通して初めてインターンシップに参加した。平川動物公園には研究室の作業であるヤギの体尺測定で行ったり私的に遊びに行ったりしていたが、業務内容は動物の飼育をする以外によく知らなかったもので、鹿児島市平川動物公園を選んだ。3日間のインターンシップだったが本当に多くのことを吸収することができた。

1日目は動物園を通して教育活動を行う部署である教育普及係の業務体験だった。午前中は公民館に出張講義に行ったり、次のイベントの看板をつくったりした。午後からは、なんと生後7日のキリンの赤ちゃんの行動観察をすることができた。2日目はシロサイやシマウマなどのエリアの担当だった。1日目とは違いものすごく体力がいる仕事だった。3日目はワオキツネザルやフラミンゴ等の担当だった。その日はシカの赤ちゃんが生まれていて、ピンク色の鼻をしたシカの赤ちゃんを見ることができた。

各日で体験したことはここには書ききれないくらい一つ一つの仕事が初めてすることばかりで、本当に学ぶことが多かった。しかし、その中でも本当に実感したのが働くことの大変さだ。毎朝早起きして、仕事場へ向かう、それだけでも私にとっては大変だった。しかし、それ以上にやりがいや責任感は大きかった。命を扱う場所であるため毎日獣医が駆けつけたり、動物が亡くなるあるいは生まれたりしていた。専門で家畜関係のことを勉強しているはずなのにいざ質問される



生まれたてのキリンの赤ちゃん

と答えることが出来ずに悔しかった。

そのため、今回のインターンシップでもっと専門の勉強を頑張ろうと思うようになった。これから他の業界のインターンシップにも参加して学生の間になんか新たな視点を身に着けたい。



「JRA 獣医師としての 臨床研修を終えて」

獣医学科 臨床獣医学講座
産業動物内科学分野

6年 堀之内 千恵

経済動物と呼ばれる動物の中でも競走馬は特殊で、牛や豚、鶏のように「食」ではなく、「競馬」で人を魅了するため生産されています。その「競馬」を開催する中心的存在である JRA で、馬がどのように活躍し、また、そこに獣医師がどのように関わっているのか知りたいと思い、5日間の臨床研修への参加を希望しました。

臨床研修では、トレーニングセンター内の往診への帯同、調教の監視、手術の見学、競馬開催業務などに参加させていただきました。JRA で働く獣医師が実際にどのような流れで業務をこなしているかを肌で感じることができ、充実した研修を送ることができました。牛豚鶏とは全く異なる方針で治療を行っており、大変興味深いものでした。

研修に参加して、JRA での仕事の多様さに驚きました。JRA での獣医師は、診療を行う平常業務と、競馬を公正に進行するための開催業務を行っており、他の研修では体験できない独特なものでした。また、JRA では獣医師だけでなく、馬の管理方法を決定する調教師や馬の実際の管理を担う厩務員、馬の爪を管理する装蹄師、など様々な職業の人達が同じ職場で働いており、競馬の主催者である JRA ならではと感じました。このように多くの人が一丸となって、競走馬というアスリートに競馬開催日まで全力でサポートしているということに感動しました。

また、職場内で活発な意見交換が行われていたことも印象的でした。先輩後輩関係なく集まって、専門書を広げて議論されていて、日々高めあっているようでした。毎日勉強だよ、とお話されていましたが、口調はどこか楽しげで、本当に誇りと責任感を持って自分の仕事に臨んでいるのだな、と感じました。

私も、来年からは社会に出て、一人の獣医師として働

きだします。この臨床研修で感じたことを忘れず、誇りと責任感を持って仕事に臨み、動物をサポートしたいです。

介護体験記



「介護体験を終えて」

生物環境学科 環境システム学講座
農業環境システム学研究室

学部4年 浜村 麻由

私は鹿児島盲学校で二日間、デイサービス美都で5日間の介護体験をさせていただきました。

盲学校では、目や耳の不自由な方だけが出場するソフトボール大会の運営や福祉施設の見学を行いました。それまでは、誰かが傍にいて常に障害者を支援するという印象が強かったのですが、試合のルールを工夫したり、施設のあらゆるところに点字表記をしたりすることで、開放的でより自由な行動をとることができるわかりました。試合中、周りの声掛けだけで正確にボールを転がしている姿を見て、健常者以上に能力に長けると感じるとともに、それを発揮できる環境を社会にもっと広めていきたいと思いました。

デイサービスでは、認知症の症状がある高齢者の方々とお話をしたり、食事をしたりして一緒に生活を過ごしました。デイサービスは家族の代わりに利用者のお世話をし、何でもしてあげる必要があると思っていましたが、洗濯物をたたんでもらうなど、できることや興味のあることは積極的にさせ、それが利用者の健康維持に繋がると学びました。初日は会話しにくく感じたのですが、壁を作らず根気よくコミュニケーションをとったことで徐々に打ち解け合うことができました。どんなに認知症が進んでいても気持ちは伝えることができる感じました。

二つの体験を通して、介護は「一方的に世話をすること」ではなく「相手の立場に立って支えること」であると考えました。利用者の感情をないがしろにせず、個々にあった援助の仕方で、相手を尊重することが双方の良い関係づくりに繋がります。また、利用者だけに目を向けるのではなく、その家族とも共通理解を深め、一緒に助け合うことが大切であると思いました。新たな発見や気づきを得ることができ、とても充実感のある体験でした。

留 学 報 告

「オーストラリアへトビタって見えた世界」

農学部獣医学科 獣医薬理学研究室
6年 梅木 由有

海外経験などほぼ皆無だった私にとって、この留学は学生生活における大きな挑戦の一つであり、重要なパラダイムシフトをもたらすものとなった。

私は、官民協働留学支援制度「トビタテ！留学 JAPAN」に採用され、平成27年にオーストラリアへ留学する機会を得た。今回、自ら留学計画を立て、受入れ先機関と交渉し、実際に留学するという一連の流れを経て、多くの貴重な学びと、素晴らしい人々との出会いと、強く生きる力を手に入れることができた。ここでは、留学中の体験と所感を中心に記そうと思う。

私の留学計画は、豪州の語学学校に1か月間通った後、現地の野生動物病院で臨床実習に2か月間参加するというものだった。実習が始まった当初は、初めての臨床実習だったこともあり、英語の専門用語が飛び交う

中で右往左往し、語学力不足や現地の学生との知識・技術量の差に打ちのめされていた。しかし、共に実習に参加していた現地学生に積極的に質問をすることで彼女らのサポートを得ることができ、日本では機会の少ない野生動物診療についてさまざまなことを学んだ。一方で、滞在先のユースホステルにおける多様な国籍の同年代の若者との出会いも、いい刺激となった。彼らの自由な生き方は、無意識のうちに日本的な価値観に囚われていた私の視野を大きく広げてくれた。また、彼らの強い自立心や、高いコミュニケーション能力と行動力、旅や労働を通して身に付けたであろう国際感覚に感心すると同時に、これらは「国内完結型」の日本人にも今後必要とされるのではないかと気付かされた。

非常に簡潔に書いたが、この経験が私に与えてくれたものはここでは語り尽くせない。最後に、実際にトビタった者として後輩に言わせてもらうならば、「私の語りを聞くよりも、まず自分の目で見てきてほしい」ということである。世界はそれほどまでに広く、複雑で、面白い。トビタつために必要なのは特別な能力でも経験でもなく、あなたのその熱意である。挑戦して失敗したとしても失うものより得るもののほうが確実に大きい。挑戦する前に諦める言い訳をしてしまったら不戦敗である。その想いを大事に、今、トビタテ！



編集後記

2016年の夏は、予想された通りの猛暑となりましたが、この後記を書いている10月下旬でも30℃近い日が続いています。さすがに、ここまですと「異常気象」と言わざるを得ません。しかし、今冬は寒くなりそうです。

さて、毎年、「あらた同窓会秋季号」は学生向けの内容となっており、多くの記事は主に4年生以上の学生が「生」の大学生活を書いてくれています。部活、アルバイト、勉学、社会活動など、いろいろなことに打ち込んだ皆さんの姿が目には浮かびます。3年生以下の皆さんもぜひ、一読し、諸先輩の体験を感じ取り、これからの大学生活の参考にしてほしいと思います。

同窓会報は100年以上続く鹿大農学部先輩と後輩をつなぐ太いパイプのひとつです。同窓会報や名簿を使って先輩とコンタクトを取ることもできます。ぜひ、もっと同窓会を利用して、例えば就職情報の収集などにも大いに活用してほしいと考えます。

(文責 附属農場 遠城道雄)

鹿児島大学農学部 あらた同窓会

〒890-0065 鹿児島市郡元一丁目21-24
TEL・FAX 099(285)8537
e-mail(aratakai@mc2.seikyou.ne.jp)
振替口座 02010-2-876
事務局の業務日 月・水・金(10:00~16:00)

印刷所 中央印刷株式会社
住所 鹿児島市春日町12-16
TEL 099-247-3300
FAX 099-248-0164
E-mail p-chuou@awg.bbq.jp



トルコギキョウの管理（農場実習）



タマネギの収穫実習



砂防学実習のひとこま